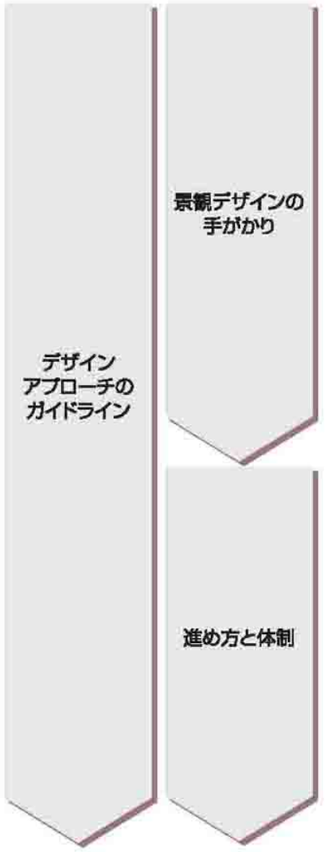
第3章

デザインアプローチ編

景観デザインのアプローチ



1 地域特性の読み解き方 ……20
(1) 歴史的背景から読み解く ……20
歴史的背景を読み解く要素
歴史資源調査マップのつくり方
(2) 自然環境から読み解く ……22
自然環境を読み解く要素
自然資源調査マップのつくり方
(3) 景観特性から読み解く ……24
景観特性を読み解く要素
景観デザイン調査マップのつくり方
(4) くらしの風景から読み解く ……26
くらしの風景を読み解く要素
くらしの風景調査マップのつくり方

2 景観デザインの進め方 ……28
(1) 進め方と実施体制 ……28
(2) 利用者の目線にたった景観デザインを推進する ……30
① 相互理解と価値観の共有
② 信頼関係の構築
③ 合意形成による愛着心や誇り意識の醸成
④ 質の高い景観デザインの創出
⑤ 景観形成の意識の向上
(3) 運営管理面に配慮する ……31
① 施設運営面での配慮
② 維持管理面での配慮

景観デザインのアプローチ

1 地域特性の読み解き方

「さっぽろ」らしさを捉えた上で、歴史的背景、自然環境特性、景観特性、くらしの風景の4つの視点から、敷地とその周辺を見つめつつ、地域特性を読み解きます。読み解きにあたっては、それぞれの調査事項を落とし込むマップを作成し、これを基に、具体的な景観デザインを考えるための手がかりを見つけます。

(1) 歴史的背景から読み解く　歴史資源調査マップの作成

歴史的背景を読み解く要素

◆ 地域の歴史的資源

計画地及び計画地周辺の歴史的背景を文献資料や古地図、地元関係者へのヒアリングなどによって調べます。

また、地元の学校の校歌にも地域の特徴が詩になっているケースがあります。地名の由来や地域の歴史を知ることは、土地の記憶や固有性を見つける上で重要となるので、次のような手がかりを基に、歴史的背景を読み解いていきます。

読み解きの手がかり

- 地名の由来について
- まちの成り立ちについて
- 古地図を収集
- 文化財、歴史的な建築物について
- 保存樹木、古木について
- 地域らしい素材など

地域の固有性や歴史にスポットをあて、次世代に語り継いでいくことも、景観デザインのひとつの役割です。

第2章 デザインアプローチ編
「さっぽろ」らしさ 生活文化の特徴を捉えることが景観デザインの基本
- 歴史的特徴
- 季節的特徴
- 地形的特徴
- まちづくりの特徴

▼

第3章 デザインアプローチ編
地域性の読み解きが景観デザインを考える手がかり

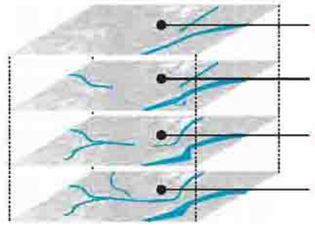
▼

第4章 デザイン手法編
施設ごとの具体的な景観デザイン

景観まめ知識
〈仰瞰景観と俯瞰景観〉
タワーや山を下から見上げる景観を「仰瞰景観」といい、また、その逆にタワー上部や山頂から見下ろす景観を「俯瞰景観」といいます。

◆ 景観 土地 空間の移り変わり

各時代の地図を用意し、道路、公園・緑地、水辺・河川、市街地などの特徴的な要素を取り出して地図上に着色していきます。それを重ね合わせることで、それぞれの変遷を整理します。



- **近年の状況**　街路の展開、まちの発展、オリンピック前後の変遷（地下鉄の整備など）など
- **戦前、戦後の状況**　街路の展開、土地利用の変遷、地形の変化など
- **開拓期**　基軸となる街路、街なみの成り立ちなど
- **開拓期以前の状況**　土地や植生の状況など

歴史資源調査マップのつくり方

計画地周辺の歴史資源や土地の移り変わり、景観の変化など、さまざまな歴史情報を現在の地図に落とし込み、歴史資源調査マップを作成します。

※イメージ図のため実際と異なります

デザインのしどころ　歴史的背景の捉え方例

● 歴史的資源からデザインのモチーフを見つける

歴史的な建築物や土木構造物などのモチーフを写真や実在するものから用いる手法があります。その際には、再現のバランスや使い方が重要です。

あまり直接的になりすぎると、陳腐なものになるので注意が必要です。

● 自然環境の変遷を知る

その土地に、本来自生する植物が何であるかを知ることは、土地の土壌特性や地形など自然環境の変遷を知る上での手がかりとなります。

古木などの歴史を知ることは、的確な施設計画をする上で重要です。

● 風景の変化を知る

風景の移り変わりを知ることは、その場の重視すべき景観要素が何であるかを見極める手がかりとなります。

植生、地形などと合わせて、まちの移り変わりを総合的に捉えていきます。

● くらしの歴史を知る

くらしの歴史を知ることで、地域の生活環境を捉えることができます。くらしの歴史や生活環境は、まちの文化を育んでいく大切な要素であり、景観デザインを考える上で知っておかなければならない重要な事柄です。

デザインの勘所　時代の移り変わりの読み解き例

■ 土地と施設、くらしの歴史を読む

道路や建物、空き地など、市街地の変化を調べるとともに、歴史の変遷を古い地図などを重ね合わせ、かつての風景や施設の様子（形態）を認識します。

また、文献や写真から地域の歴史を調べ、暮らしぶりや生活の歴史を読み解き、デザインに生かします。

■ 水辺や緑地の変遷を読む

水辺や緑地の変遷を読むことは、かつてはどのような場所であったかを知る手がかりとなります。

特に、これまで残された樹木は、地域の歴史を語るもので、その歴史やいわれを調べ、デザインの手がかりとします。樹木、並木などは保存することを基本としながら、シンボル樹木などとしてデザインに生かしていきます。

■ 歴史的な建造物等との関係性を考える

計画地周辺やその地域に歴史的な建造物等や文化財などの景観資源がある場合、それらの歴史的な資源との関係性を考えつつ、デザインすることが重要です。

■ 直接的な表現を控える

地域の歴史を景観要素として生かすことは大切ですが、地域の自然資源や歴史資源、特産品や地名などをデザインのモチーフにして多くの街灯に添架したり、舗装パターンに安易に引用するなど、度の過ぎた景観デザインは避けるべきです。地域・歴史資源のあまりに単純な形態への置き換えは場合によっては、まちの品格を失うおそれがあります。

■ 資料収集に便利なところ
・札幌市文化資料室　・札幌市写真ライブラリー　・中央図書館（札幌資料室）など

◆地域特性を読み解く4つの視点

(2) 自然環境から読み解く

自然資源調査マップの作成

自然環境を読み解く要素

◆ 自然環境要素

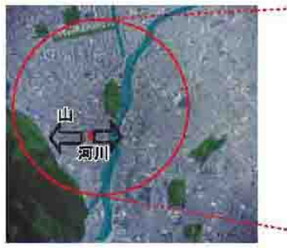
同じ札幌市内でも山麓地と平地では積雪量や風向きなどに大きな地域差があり、北側斜面と南側斜面では自然環境が違います。計画地を取り巻くさまざまな自然環境の要素を整理し、読み解くことで、景観デザインを考える手がかりが見えてきます。

具体的には、地形、地勢、植生、土壌環境、水系などの状況を、地図上に整理します。

自然環境を俯瞰するレベルは、市域レベルの「広域」、地形や植生の違いが出やすい「中域」、日常生活圏となる「狭域」の3段階に分けて整理します。

広　域

市域レベルの視点。まちの成り立ちや都市計画などを踏まえ、まち全体を俯瞰するように自然環境を捉えます。



中　域

区域レベルの視点。周辺の土地利用や市街地の変遷、周辺の公共施設等との関係性など、より詳細に自然環境を捉えます。

狭　域

町内会などのレベルの視点。計画地や近隣のようす、周辺の公共施設等の関係性など、そこに暮らす生活者の視点から、多面的、多角的に自然環境を捉えます。

景観まめ知識

〈景観と風景〉

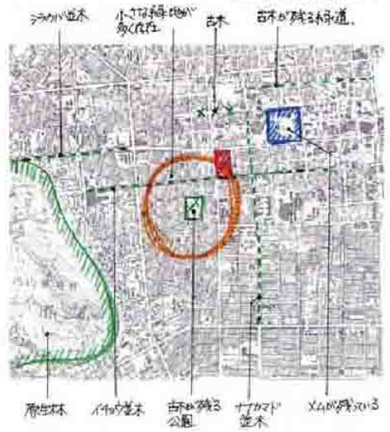
「風景」とは文学的に用いられます。風土という言葉に似て、人間にとって認識される視覚環境の全体像を指します。「景観」とは科学的に用いられます。風景のうち工学的アプローチによって把握できるフィジカルな側面からの視覚像を指します。

自然資源調査マップのつくり方

広域、中域、狭域それぞれの視点から整理した、さまざまな自然環境情報を地図上に落とし込みます。

これと21頁の歴史資源調査マップを重ね合わせ、地形、水辺・河川、緑、道路、市街地の当時の自然環境要素がどのように残されているのかなど、より詳細な地域情報として整理し、自然資源調査マップを作成します。

※イメージ図のため実際と異なります



自然環境や歴史的背景を調査するには、空中写真などの重ね合わせも有効です。

デザインのしどころ　自然環境の捉え方例

● 土地本来の性質を知る

計画地とその周辺の地形・植生・水系などの環境要素とその変遷を整理し、その土地本来の性質を知ることで、土壌環境の改善、植栽の考え方、地形改変の必要性など、施設整備の方向性やデザインの方針が見えてきます。

● 環境要素の連続性を把握する

中島公園

河川や緑などの自然環境要素を、各施設が連携して、空間整備に生かすことで、安らぎと潤いのある広い空間を生み出すことが可能となります。

環境要素を整理し重ね合わせることにより、それぞれの関係性が見えてきます。

● 緑の分布などを把握する

道路や公園、河川などにおける緑の配置や樹種を把握します。計画する施設と周辺の公共施設等との望ましい関係を緑地空間づくりの視点から検討します。

● 北国特有の色の見え方を知る

札幌の色彩環境を知り、色彩計画に生かすことが大切です。

- 四季の変化がはっきりしており、背景色が大きく変わる。
- 早春や晩秋など、色彩感の乏しい時期がある。
- 湿度が低いため、空気が澄み色鮮やかに見える。
- 緯度が高いため、光が育つぽく感じられる。

デザインの勘所　環境の特徴を生かす例

■ 環境特性にあった緑の空間づくり

地形に変化のある「さっぽろ」のまちは、湿気の多い土地から乾燥している土地までさまざまな土壌を有しており、湿り気を好む植物もあれば乾燥を好む植物もあります。したがって、この組み合わせを間違えると、良好な緑環境の創出は困難です。本来の環境を理解し、現状がどうであるかを調べた上で緑の空間をつくる必要があります。

■ 環境の要素を捉えつなぐ

河川や池などの水辺空間に沿って公園やプロムナード、休憩広場を計画し、市民が水辺に近づいたり、散策や休憩ができる親水空間として整備することなどがあげられます。

公園と公共建築物を一体的に整備した札幌コンベンションセンターや、中島公園の池周辺のデッキや休憩施設などは、環境要素をつないだことによって活用の幅が広がった例といえます。

■ 緑により景観を整える

緑には、安らぎと潤いの空間をつくりだすだけではなく、例えば都心部などの高層建築物の街なみにおいては、ヒューマンスケールを与えたり、住宅地においては、愛着心や良好な住環境を整える役割などがあります。

SEIYOしんえい四季のまち

◆地域特性を読み解く4つの視点

(3) 景観特性から読み解く　景観デザイン調査マップの作成

景観特性を読み解く要素

◆ 周辺の景観構成要素

計画地周辺の建物や緑などの景観構成要素を調べ、計画地周辺を特徴づけている要素を整理します。

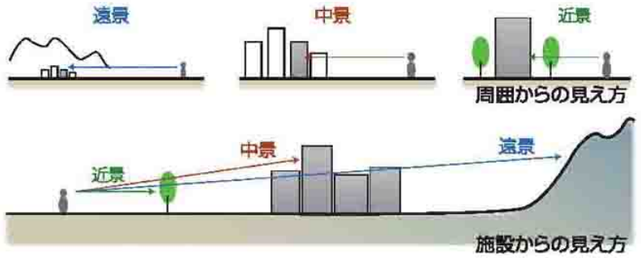
例えば、高い建物が建ち並び圧迫感を感じるということや、公園や街路樹などで緑のつながりが感じられるなど、さまざまなことが見えてきます。

◆ 遠景、中景、近景の見え方

対象となる施設の[周囲からの見え方]や、[施設からの見え方]など、いろいろな視点から考えることが重要です。

施設計画の際には、まず、現地調査をしっかり行い、さまざまな視点場から計画施設の見え方を検討し、さらに、施設からの見え方も検討します。これにより、施設周辺の景観構成要素がわかると同時に、景観構成要素の見え方が確認できます。

この作業を遠景、中景、近景に分けてマップに整理します。



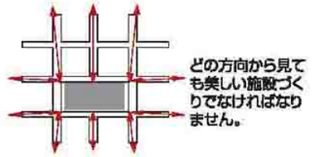
景観まめ知識
〈シーン景観とシークエンス景観〉
「シーン景観」は、ある場所において一方向を見たときの景観をいい、風景写真や絵画のようなものです。これに対し「シークエンス景観」は車窓から見える風景が連続して変化していく、視点の移動によって変化する景観をいいます。

景観まめ知識
〈内部視点景観と外部視点景観〉
景観の領域を外側から見る視点を「外部視点景観」といい、内側から見る視点を「内部視点景観」といいます。内部視点景観は、領域内部の景観のみならず、内側からの領域外の眺め(建物内部から見える山なみなど)もいいます。

◆ 俯瞰してみる(点的要素と線的要素)

公共施設等は、公園や公共建築物などの点的構成要素と、河川や道路などの線的構成要素とに分けられ、それぞれの施設がきめ細かに連携することが、景観の質を上げることにつながっていきます。

特に、碁盤目状の街路で構成される札幌の市街地では、四方から見られることを意識する必要があります。逆に、見るという視点でも開口部や視点場などを検討した施設計画をします。



見ると見られるの関係図

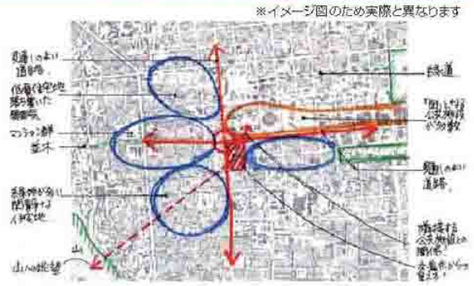
道庁赤レンガ庁舎

札幌市時計台

景観デザイン調査マップのつくり方

遠景、中景、近景のそれぞれの視点で整理した景観構成要素や、施設からの見え方を地図に落とし込みます。

※イメージ図のため実際と異なります

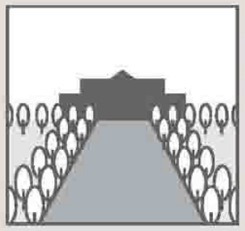


デザインのしどころ　景観特性の捉え方例

● 周辺景観との関係性を考える

公共施設等の多くは、その特性から景観の「地」をつくっているという認識を持つことが基本です。

「地」となる施設は施設周囲との調和を第一に考えます。



多くの公共施設等が『地』となる一方で、まちのランドマークとしての役割を果たすものがあります。しかし、その際にも、『地』の一部のデザインを取り入れるなど、街なみ全体を総合的に判断し、景観デザインを行う必要があります。

● 見ると見られるの関係を生かした施設づくり

ニューヨーク・ブライアントパーク

ニューヨーク・ブライアントパークの広場とカフェは、見ると見られるの関係をうまく生かした例です。カフェからは広場の賑わいや緑の空間を、広場からは、カフェからの視線を意識したパフォーマーやカフェを背景にくつろぐ利用者を眺めることができます。

デザインの勘所　『地』と『図』を見極め方例

■ 主役か脇役かを考える

景観デザインでは、計画する景観要素が主役となる『図』であるべきか、または、脇役となる『地』であるべきかを見極めることがポイントです。

例として、広場のデザインをするとき、主役は広場を使う人です。舗装のパターンが複雑だったり目立つ色彩とすると、主役となる人が目立たず、生き生きと活動しているようすが見えません。

■ デザインしないデザインもある

わざわざ人の目を引くような奇抜なデザインは、時として景観全体の中では違和感を感じる場合があります。整備するからには、凝ったデザインを、と頑張った結果が評価されないこともあります。

景観デザインは、施設の本質を見極めて環境全体の中で整えていくことから、デザインしすぎないようにデザインすることが大切です。

■ 内部視点景観と外部視点景観を見る

計画地から見える美しい景観を意識した施設づくりを行うとき、逆にその施設は、反対側からは見られることを意識しなければなりません。見ることと見られることを同時に考え、その関係性を整理してデザインに生かします。

重要ポイント

『図』と『地』の見極め

『図』と『地』は、物の見え方に関する基本的な概念です。『図』とは、全体の中で際立って認識され、そこに感心が向かう部分を指し、『地』とはその背景となる部分を指します。

下の写真では、ランドマークとなる道庁赤レンガ庁舎の歴史的な建築物が『図』、その背後の建物や空が『地』となります。イメージしてください。仮に背後の建物を同じレンガ色にしたり、奇抜なデザインとした場合、道庁赤レンガ庁舎の象徴性が失われる結果となります。

このように景観デザインにあたっては、際立たせたい『図』となる部分と、その背景となる『地』となる部分の役割を認識し、街なみ全体として捉える必要があります。

景観における『地』と『図』

◆地域特性を読み解く4つの視点

(4) くらしの風景から読み解く　くらしの風景調査マップの作成

くらしの風景を読み解く要素

◆ 住まう人

計画地周辺の人口の変化、人の流れ、年代別人口比率、地域住民の暮らしの様子などの特徴を、広域、中域、狭域のそれぞれのレベルで整理します。

少子高齢化が進む高齢者が多く住む地区、あるいは新しい住宅やマンションの建設によって若い世代が多く住む地区、また、人口増加が見込まれる地区など、それによって、利用者層の想定が可能になります。

◆ 住まう環境

計画する施設の規模や性格に応じて調査区域のレベルを設定し、住宅施設や商業施設、公共建築物などの生活関連施設、公園などの分布状況を整理します。

計画する施設や既存の施設との役割を認識し、重複することのないよう、機能別、用途別に把握します。

◆ ハレとケ（非日常と日常）

私たちの日々の暮らしや生活などの日常のことを「ケ」というのに対して、旅行やお祭り、イベントなどの非日常のことを「ハレ」といいます。

くらしの風景を読み解くとき、中域、狭域レベルで日常的（ケ）な居住者の活動特性と、非日常的（ハレ）なお祭りやイベントなどの開催場所や内容などを整理します。

また、賑わいのある地区か、落ち着いた地区かなど、現地調査などによって、地域の特徴を捉えていきます。

景観まめ知識

〈高齢社会〉

65歳以上の人口が総人口のうちに占める割合に応じてその呼び方が変わります。　高齢化社会:7%～
高齢社会　:14%～
超高齢社会:21%～

札幌市は平成19年4月1日現在で18.1%。

景観まめ知識

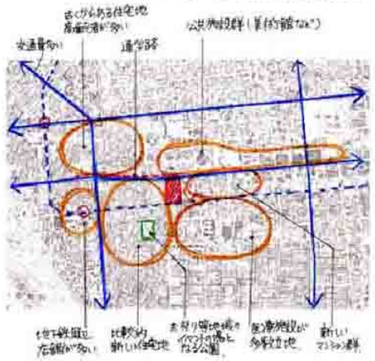
〈ハレ〉
非日常
晴れ、晴れ着、晴れの舞台

〈ケ〉
日常
褻(け)、褻着(け)、ふだんの生活

くらしの風景調査マップのつくり方

これまで調べた、住まう人、住まう環境、ハレとケを総合的に捉え、これらの情報を地図に落とし込み、計画地を取り巻くくらしの特徴を把握します。

※イメージ図のため実際と異なります



調査のポイント

・広域な人の流れ
都心からの様々な交通機関による人の流れの特徴を把握します。

・人口などの変化
居住者の年齢構成や男女構成などを把握します。

・住民の様相
お祭りやイベントの特徴などを把握します。

デザインのしどころ　くらしの風景の捉え方例

● 神社やお寺でのお祭りなどの風景を見る

地域住民の寄りどころとなる施設として、神社やお寺などがあります。

地域では歴史的な催し物が、神社やお寺を中心に開催されていることが多いので、それをひとつの風景として捉えます。

● 子育てイベントなどの風景を見る

学校や地区センターなどでは、未就学児から小学生や中高生を対象とした青少年イベントが開催されています。

こういった地域の取り組みをきめ細かに把握することが重要です。

● 文化的な取り組みを見る

近年では、さまざまな市民活動とともに、芸術文化活動も盛んに行われています。

生活関連施設の分布状況と合わせて、地域にどのような芸術文化活動があるのかを把握します。

● 人の流れ、地域のまとまりを見る

通勤や登下校時の様子、近道や子どもたちが集まる場所などを見ることで、利便性の向上のために必要なものが浮き彫りになってきます。

活動空間としてのまとまりや人や車の動線など、日常生活の様子を把握します。

デザインのヒント　くらしの要素の生かし方例

■「ひと」をみる

くらしの風景の中では、人は大切な景観要素といえます。地域住民の様相や人の流れを見ながら、利用対象者を想定し、求められる施設について検討します。

■「こと」をみる

生活の風景と連動して、季節ごとに日常的な活動(ケ)や非日常的な活動（ハレ）を見ながら、地域にとって重要な景観ポイントをつかみ、施設計画に生かします。

例えば、屋外から屋内へとつながる大きな空間は、収穫祭や夏祭り、フリーマーケットなど四季を通じて利用できます。多くの人が利用する公共施設等は、地域の活力を育てるとともに、まちの風景をつくります。

■「もの」をみる

生活関連施設の分布状況や、生活用具を見ることで、地域の暮らしの特徴を捉えます。

例えば、冬期間でも滑らない路面の工夫や雁木などの地域の特徴を捉えることは、単にデザインするだけではなく、安全性と機能性を兼ね備えた施設づくりを行う上で重要です。

■「とき」をみる

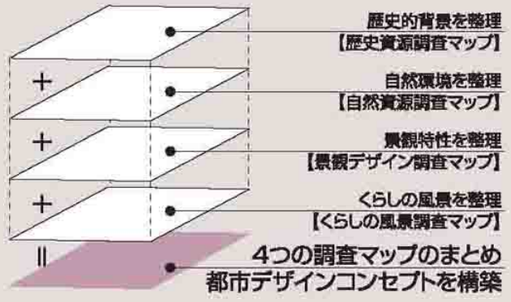
四季折々の季節の変化に対応した、特徴ある生活風景を捉えます。

イルミネーションやビアガーデン、庭先でのジンギスカンなど、季節ごとの生活風景を知ることが施設計画を行う上での手がかりとなります。

○ 地域特性の読み解き ―景観デザインの調査マップをまとめる―

これまでに作成した4つの調査マップを重ね合わせて、82頁の景観デザインふり返りシートpartⅠ:アプローチシートの【調査マップのまとめ】欄にまとめます。

同時に景観デザインのコンセプトを構築していきます。



2 景観デザインの進め方

(1) 進め方と実施体制

はじめにガイドラインを読み、札幌の全市的特徴をしっかり捉えてから、地域特性を読み解きます。

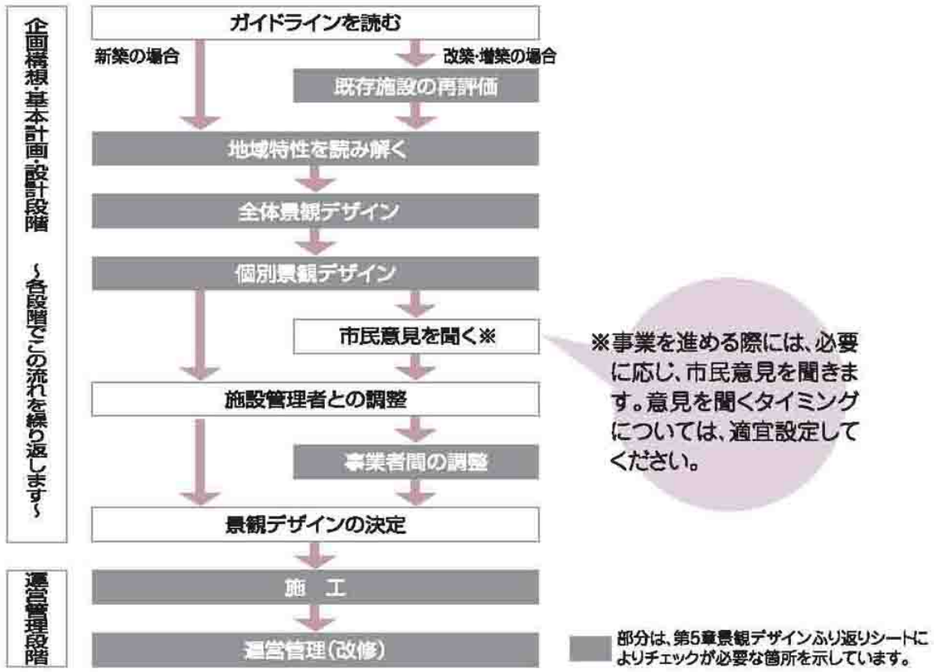
改築や増築の場合は、その施設の景観を再評価し、景観デザインに生かすことが必要です。

また、調和のとれた質の高い景観デザインのためには、市民と事業者との協働はもちろんのこと、行政内部の調整も重要です。

特に市民に対しては、協働の場をつくることで、市民ニーズを把握し、事業進行のプロセスを周知することで、合意形成を図ることが大切です。

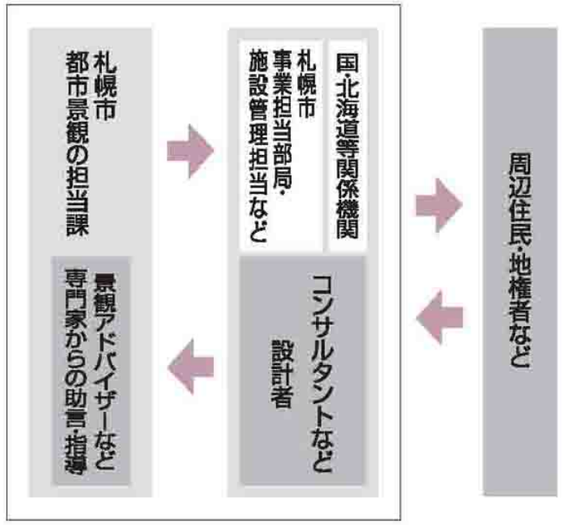
景観デザインを進める際には、施設の景観デザインに対し、繰り返しデザインプロセスをふり返り、デザインの方向性を検証しましょう。

■ 景観デザインの基本的な流れ



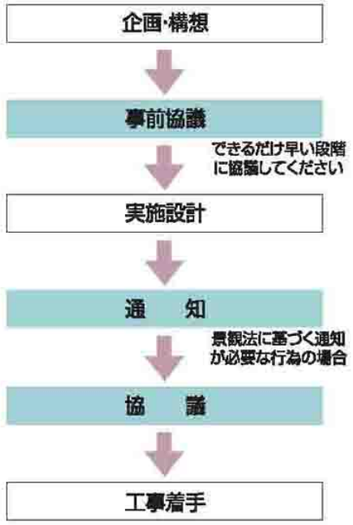
■ 景観デザインの実施体制

事業を担当する部局が中心となって、景観デザインの検討や周辺住民や地権者の意見収集、国や北海道等の関係機関との調整を行います。その過程において、都市景観の担当課と十分に協議し、必要に応じて景観アドバイザーなど専門家の助言を受け、景観デザインの質の向上を図ります。



■ 都市景観の担当課との協議の流れ

事前協議は、企画構想段階から受け付けています。できるだけ早い段階に協議しましょう。



協働の場づくりのポイント

多様な場づくりと市民参加

● 信頼関係を構築する

設計や運営の各段階で、きめ細かな意見の調整を行うことは、互いの信頼関係の構築につながります。

それが結果的に質の高い景観デザインをつくります。

● 相互理解を図り価値観を共有する

事業者、施設管理者、利用者、そして設計者が将来のイメージを具体的に共有するには議論の積み重ねが必要です。

協働のデザインのプロセス

丁寧に繰り返すプロセスをデザインする

● 参加者が分かりやすい工夫をする

参加の場において、カタカナ言葉や専門用語の多用は不信感をもたらします。分かりやすい表現や説明を心がけることが重要です。

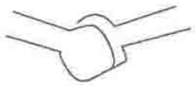
● 繰り返し議論をする

大切なことや重要なことは、何度も繰り返し議論することが大切です。

それは、個人の価値観や視点によって合意したものが簡単に覆ってしまうからです。議論を重ねながら相互理解を深めつつ、価値観や大切なことを共有していきましょう。

(2) 利用者の目線にたった景観デザインを推進する

アンケートや意見交換、ワークショップ、ヒアリングなどの多様な参加の場を設け、多くの意見や情報を語り合いつつ、合意形成を図ることが大切です。
景観に配慮しつつ、利用者の目線に立ち、みんなに愛される施設をつくりましょう。

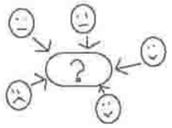


① 相互理解と価値観の共有

施設デザインに対して、それぞれが思い描くイメージはさまざまで、これまでの経験や育った環境などによって違います。個々が思い描くイメージや思いを相互に理解し、価値観を共有することが合意形成の第一歩です。

② 信頼関係の構築

複雑な事業の調整や合意形成の場面では、互いの信頼関係が大事です。
きめ細やかな対応や真摯な姿勢が信頼関係を築きます。

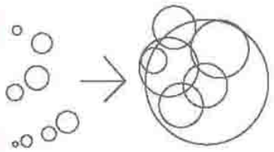


③ 合意形成による愛着心や誇り意識の醸成

市民参加や協働など、合意形成によって、まちづくりが行われることで、まちや施設への愛着心や誇り意識が醸成されます。一人ひとりが大切にまちや施設をつくり育てていく環境や仕組みづくりが必要です。

④ 質の高い景観デザインの創出

対象とする施設やデザインに関する専門知識がなくても、利用する市民のさまざまな視点から議論することは、質の高い景観デザインにつながります。



⑤ 景観形成の意識の向上

市民と事業者の協働の取り組みは、質の高い景観デザインを実現するだけではなく、景観形成に対する意識の向上につながっていきます。少しずつ良質な景観デザインの輪を広げていく努力が必要です。

(3) 運営管理面に配慮する

これからの公共施設等は、環境面や時代の変化、市民ニーズに対応しながら、いつまでも長く使用していかなければなりません。
そのためには、運営管理面においても景観に配慮し、大事に使うことが大切です。

① 施設運営面での配慮

●市民に親しまれるような施設運営を行う
- 市民活動を受け入れるとともに、季節ごとのイベントなどを演出する。
- 市民が施設運営にかかわれる場を提供する。

② 維持管理面での配慮

●良好な状態を維持する
- 施設や施設周辺の状況を把握する。
- 時間の経過に耐え加齢とともに風合いが増す、エイジングに配慮したメンテナンスを行う。
- 景観デザインの意図や利用のルール、維持管理の方法をしっかり整理し、伝える。
- 市民が維持管理にかかわれる場を提供する。

●時代の変化や市民ニーズに的確に応える
- 優れた景観デザインを守りながらも時代の変化や市民のニーズに的確に対応する。

市民参加のポイント

多様な参加の場づくりときめ細かな調整を怠らない

● 市民に親しまれる施設づくりを目指す

市民に親しまれる施設とするには、計画や設計など各段階で、多くの市民参加の場を設け、事業者ときめ細かな意見の調整を行い、市民ニーズに応えます。

● 市民ニーズを的確に捉える

施設づくり計画の段階で、ワークショップやヒアリング、意見交換、アンケートなど市民参加を促すさまざまな手法を用いて市民ニーズを的確に捉えることが重要です。

● 誇り意識、愛着心の醸成を図る

市民の誇れる施設となり、愛着心が芽生えるようになるためには、施設運営面においても多様な市民ニーズに対応するプログラムを継続して行うことが必要です。

● 参加しやすい環境をつくる

イベントの開催や子どもの参加など市民が親しみやすい工夫や参加しやすい環境をつくることが運営管理面では重要です。

市民参加のプロセス

的確な目標の設定と柔軟な対応を行う

● 自己実現のプロセスをデザインする

利用者の思いや目的を実現するため、市民参加や協働のプロセスを組み立てます。それには各参加の段階、協働の場面において、明確な目的、目標を、無理のないかたちで設定することが重要です。

● さまざまな市民意見に耳を傾ける

子供から高齢者、会社員や主婦など、さまざまな利用者の意見に耳を傾けることが大切です。
多様な参加の場を持ちながら利用者の目線で設計、管理、運営していくことが重要です。

● 守り育てる意識を育む

いろいろな場面にきめ細かく対応することを基本とし、市民や利用者とともに施設を守り育てる意識の醸成を図ります。
柔軟な施設運営体制によって、市民も運営や維持管理に関わるプロセスをデザインします。

● 常に景観形成を意識する

施設計画や施設の活用、管理などの取り組みの中で、景観形成にどのように関係するかを常に考えながら進めていくことが大切です。
市民の参加や住民の工夫がより良い景観をつくっていきます。